

長岡遺跡の物語ー足元に眠る一万年史ー

展示解説シート

はじめに

今年度の坂戸市埋蔵文化財出土品展は、坂戸市入西地区西端の台地上に位置する長岡遺跡をテーマとしています。長岡遺跡は、昭和 58 年（1983 年）に最初の発掘調査が行われました。その後、現在に至るまで計 32 回の発掘調査が行われており、市内においても有数の遺跡として認知されています。

本企画展では、これまでの発掘調査によって出土した遺物を、通史的に 4 つのセクションに分けて展示しています。それぞれの時代でどのような特徴を有し、人々がどのような営みを育んできたのか、その実態に迫ります。また、出土遺物から見える周辺地域との関わりについてもご紹介します。

本企画展を通じて、長岡遺跡が 1 万年以上にも渡り紡いできた歴史という『物語』を体感していただければ幸いです。



図 1) 長岡遺跡 26・27 区空中写真（南東から越辺川方面を望む）

section1 旧石器時代・縄文時代

旧石器人の足跡

日本列島における人類の最古の痕跡は、約3万年から1万5,000年前頃の旧石器時代にまで遡ります。当時の人々は狩猟を中心とした生活を営んでいました。獲物を追うために定住はせず、簡易的な住居を建て、移動を繰り返す流動的な生活をしていたと考えられています。



図2) ナイフ形石器

縄文時代以前の旧石器時代では、『土器』がまだ発明されていません。そのため遺跡から出土する遺物のほとんどが、ナイフ形石器(図2)や細石刃等の『石器』です。石器は、石材を加工した道具で、当時の人々の生きるための生活必需品でもありました。長岡遺跡21区の調査では、関東ローム層の土中からナイフ形石器や石錐などの複数の石器が出土しています。石器が出土した周辺では、黒曜石の剥片も出土しており、この場所において石器作りや加工が施されたと考えられます。これらの出土遺物からは長岡遺跡周辺が生活の拠点となっていたことがわかります。

縄文時代の長岡遺跡

長岡遺跡では前期、中期、後期の集落跡が発見されています。特に中期(約4,500年前)にかけては、多くの竪穴建物とともに雄大な文様が特徴の『勝坂式土器』(図3)が豊富に出土しており、縄文時代中期の繁栄ぶりを見ることができます。また、土器だけでなく木の実をすり潰し、粉状に加工する磨石や石皿なども出土しており、長岡遺跡が生活の拠点となっていたことが分かります。



図3) 勝坂式土器

長岡遺跡においては『称名寺式土器』が出土する後期の集落を最後に縄文時代の遺構が確認されなくなります。後期から晩期にかけてはに気候が寒冷化した時代と考えられており、自然環境の変化によって移動を余儀なくされたのかもしれない。

関山式土器と落とし穴

長岡遺跡 26・27 区（図 1）の発掘調査では、縄文時代前期の落とし穴（図 4）が検出されました。落とし穴の形状は楕円形で、底に向かうほど狭くなっています。これは、落とし穴にかかった獲物が簡単には外に出られないようにするための工夫と考えられます。今回検出した落とし



図 4) 縄文時代前期の落とし穴

穴からは、『関山式土器』と呼称されている縄文時代前期の土器の破片が出土しています。『関山式土器』の特徴として、羽状縄文という特徴的な文様のつけ方が挙げられます。鳥の羽のような菱形を作るこの施文方法は縄文時代前期にかけて広く使用されました。

勝坂式土器と縄文集落

「勝坂式土器」は雄大で立体的な文様が特徴的な縄文時代中期の土器です。その分布は中部から関東地方に広く隆盛しました。文様にはヘビやイノシシなどの動物がデザインされ、大自然と共生する縄文人たちの精神性が深く表現されています。

『勝坂式土器』が作られていた縄文時代中期は、前期（約 6,500 年前）から続く温暖な気候に伴い日本列島的に集落や人口が増加していたと考えられています。長岡遺跡も例外ではなく、『勝坂式土器』は他の縄文時代の土器と比較し非常に多く出土しています。縄文人が暮らした竪穴建物も数多く発見されているため、何世代にも渡る集落が形成されていたと考えられます。

称名寺式土器と祈り

長岡遺跡 25 区で検出された 5 号竪穴建物からは『称名寺式土器』の他、石斧などの石器が出土しています。また、建物中央には直径及び深さが約 120cm の円柱状の土坑が掘削されていました。この土坑は、建物の中央に造られていた石囲炉を破壊し掘削されており、土坑の底面には炉の炉石が廃棄されていました。この一連の行為は竪穴建物廃絶時または廃絶後に行われた祭祀行為の可能性が考えられます。この行為の詳細は不明ですが、何らかの『祈り』が行われたのかもしれません。

section2 弥生時代後期から古墳時代前期

広場を囲む？！ 竪穴建物

弥生時代は、日本列島に稲作がもたらされた時代として一般的に理解されています。諸説ありますが、弥生時代は約 2,400 年前から約 700 年間続きました。長岡遺跡の発掘調査で発見されたのは弥生時代後期(約 1,900 年前)以降の遺構が中心となります。特に、近年行われた調査によって、長岡遺跡の性格が少しずつ明らかになってきました。

弥生時代の竪穴建物の平面形は、おおむね楕円や丸みを帯びた長方形で、細く深い柱穴を持ちます。近年発見された大型の竪穴建物と複数の小型竪穴建物は、若干の時期差が想定されるものの帯状に立地します。やや南の調査区でも同時期の竪穴建物が検出されており、間の空白地を囲むように竪穴建物(図 5)が立地していたと考えられます。台地の先端にあるこの集落は、弥生時代末期(約 1,800 年前)の拠点集落であったと考えられます。

出土した遺物は弥生土器の中でも、吉ヶ谷式(吉ヶ谷系)と呼ばれる輪積の痕跡や縄文が特徴的な土器となっています。人々はより豊かな水田を求めて、丘陵から台地、低地に生活域を広げました。

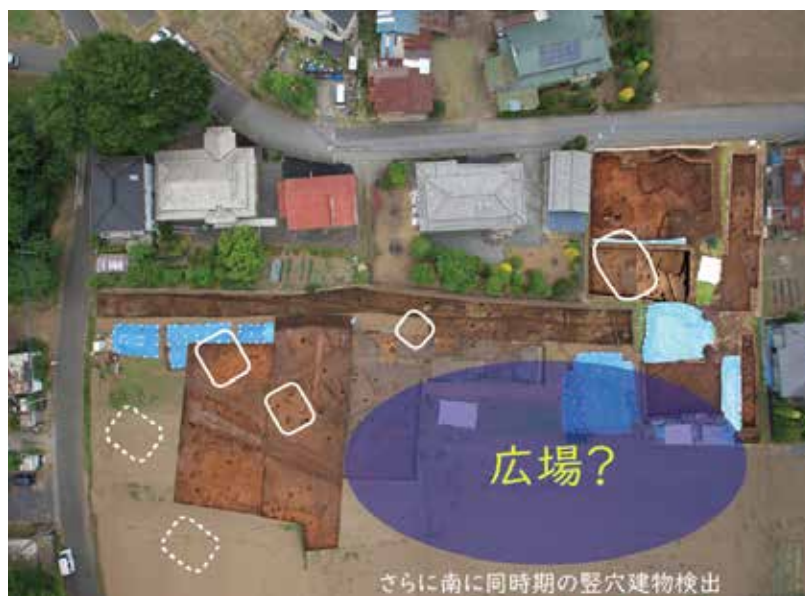


図 5) 広場を囲む竪穴建物

集落と墓域の移動

各調査で出土した土器は、集落が移動した可能性を我々に示しました。台地の縁辺部で行われた調査では、櫛描波状文を特徴とする弥生時代後期の岩鼻式土器が少数出土しました。台地の内部では、弥生時代後期～末期頃の「吉ヶ谷系土器」を持つ建物が出てきます。その後ハケ調整を持つ台付甕が共伴する古墳時代前期(約 1,700 年前)になると、竪穴建物はさらに台地の奥へと移動します。このように、時期を経るごとに集落は南に移動する傾向が見て取れます。

このように、時期を経るごとに集落は南に移動する傾向が見て取れます。

集落の移動と連動し、墓域も移動します。長岡遺跡では岩鼻式土器が出土した地点よりも更に北側の台地と低地の間で方形周溝墓が発見されています。これに加えて、長岡遺跡の東側に位置する稲荷前遺跡では、台地縁辺部から方形周溝墓群が検出されています。それよりも新しい古墳時代前期の方形周溝墓は長岡遺跡の南東側に位置する花見塚遺跡 23 区（図 6）で発見されています。

耕作地は発見されていませんが、現在水田となっている入西北部ではすでにこの頃から稲作を行っていたと考えられます。



図 6) 花見塚遺跡 23 区 方形周溝墓出土の土器群

古墳前夜の長岡遺跡

長岡遺跡において、なぜ集落と墓域の移動が起こったのでしょうか。その理由は坂戸西スマートインターチェンジ周辺の遺跡の動向から推察できます。低地にある下田遺跡では、弥生時代末期に集落が衰退し、西側の台地上に新しい集落（西浦遺跡）が出現します。併せて、墓域も連動するように移動しています。高麗川を避けるように移動する集落の動態は、居住地を放棄せざるを得ない大規模な水害が起こったことを示しています。このような氾濫は越辺川でも起こり、長岡遺跡に大きな影響を及ぼしたことでしょう。長岡遺跡でも、弥生時代後半から古墳時代前期にかけて、集落は少しずつ台地の奥に移動しています。台地に逃れた人々の中には、もともと長岡遺跡に居住していた人や他地域から逃れてきた人々もいたかもしれません。稲荷前遺跡や低地にあった墓域も集落の移動に合わせて、台地縁辺からやや内陸まで範囲を拡大します。

水害による環境変化が直接的な原因となったかは定かではありませんが、古墳時代前期を境に人々が居住した痕跡は著しく減少します。そして長岡遺跡に再び集落が誕生するのは古墳時代後期になります。

section3 古墳時代

密集する竪穴建物

長岡遺跡は古墳時代前期以降、人々が居住しない空白期間が存在していました。しかし、古墳時代後期（約 1,400 前）にはいと突如として集落の形成が始まります。古墳時代終末期（約 1,300 年前）には集落の規模がピークを迎え、奈良時代の初め頃までは継続して集落が営まれます。



図 7) 長岡遺跡 25 区 重なり合う竪穴建物

検出される竪穴建物内からは坏、甕、甗などの土器が豊富に出土しています。特に古墳時代終末期では、比企型坏や有段口縁坏と呼ばれる坏の出土が目立ちます。

約 150 年間に渡り継続した集落は、奈良時代が始まる 8 世紀初頭（約 1,200 年前）にかけて縮小していきます。はっきりとした理由はわかりませんが、前時代的な古墳時代から天皇を中心とした中央集権国家である奈良時代へと国家が移り変わっていく過程で、長岡遺跡内でも集落の再編が行われたのかもしれません。

集落を横切る大溝の謎



図 8) 2 号溝完掘写真

長岡遺跡 23・24・28 区の調査では、遺跡を東西に横断する大溝（図 8）が検出されました。溝幅は最大で約 7 m、深さは最大で 90 cm を測ります。溝の両端には連なるように複数の小穴が検出され、木杭を伴う柵が巡っていたことが考えられます。

大溝の掘削時期は長岡遺跡の集落が最盛期を迎えた頃と合致します。集落の拡大と共に掘削された溝は、何らかの区画を示す区画溝として整備されたものかあるいは、溝が西側の越辺川方面へ向かっていることから水路として掘削されたとも考えられます。

塚原古墳群と長岡遺跡

長岡遺跡の南西に立地する塚原古墳群は、毛呂山町側の大類古墳群と併せて苦林古墳群と総称され、前方後円墳5基を擁する古墳群として展開しています。古墳群の形成時期は出土遺物から概ね古墳時代後期とみられ、長岡遺跡の古墳時代後期の集落の形成時期と重なることから、長岡遺跡を母体として古墳群が展開されたことが考えられます。

長岡遺跡からは古墳群との関係を示す特殊な遺物が出土しています。特に提碁と呼ばれる携帯用碁石は古墳の副葬品として出土することが多く、集落から出土することは比較的稀な事例です。提碁をはじめとする威信財は、所有することが可能な人物の階層が限られてくることから、長岡遺跡は塚原古墳群に埋葬された人物が暮らした豪族の居住地であった可能性が考えられます。

古墳時代から奈良時代へ

長岡遺跡の集落が最盛期を迎えた古墳時代終末期は、奈良時代との間となる時代です。日本中が新時代へと転換していくさなか、出土する土器に変化が見られます。7世紀後半頃では土師器が出土遺物の主体でしたが、7世紀末ごろからは須恵器が増加し、8世紀にはいると須恵器の出土量が土師器を上回る逆転現象が生じます。この現象は一過性のものではなく、平安時代に移っても見られる継続的な現象の始まりでした。

赤い土器（土師器）から青灰色土器（須恵器）への変化は、時代の変化を視覚的な情報として捉えることができる目印であるといえるでしょう。

古墳時代の長岡遺跡

長岡遺跡の立地する入西地区西端は、越辺川に近く水上交通や農耕のための水利を得やすい場所に立地しています。中世には、入西の水田を潤すために『阿弥陀堰』と呼ばれる用水路が掘削されており、古墳時代においても農耕を行う上で重要な地であったことは想像に難くないことです。つまり、長岡遺跡は古墳時代後期に集落や周辺地域の開発を進め、水利・水運の利権を抑えつつ、近隣を治めた豪族の居住域であるとともに、支配権を行使するための拠点であったと考えられます。

section4 奈良・平安時代～中世

律令国家の幕開けと官人のステータス（奈良時代）

奈良時代（約 1,300 年前）の日本は律令国家の道を歩み始め、入間郡域では役所（郡衙）や道路網が整備されます。長岡遺跡は周辺集落との再編が進み竪穴建物が急減しています。

閑散とした長岡遺跡では新たに掘立柱建物群（図 10）が建設され、これまでの伝統的な拠点集落から特殊な機能をもった「施設」へと変容している様子が伺えます。

遺跡では「稜碗」や「円面硯」（図 9）などの特殊遺物が見つっています。特に文房具である円面硯は、筆と硯、木簡の誤字を修正する小刀（刀子）を必須アイテムとした官人（下級役人）の存在が想起されます。官人のステータス「円面硯」の出土は、この遺跡の性格を明らかにするための重要なアイテムと言えるでしょう。

長岡遺跡の位置関係をみると、対岸の岩殿丘陵には国分寺の瓦を生産した南比企窯跡群と、拠点集落の入西遺跡群（にっさい花みず木周辺）の中間に位置しています。そのため、掘立柱建物群（倉庫や事務所）が存在する長岡遺跡は国家事業である窯業製品の生産や流通を管理（検品や保管など）する公的な出先機関のような場所だったのかもしれません。

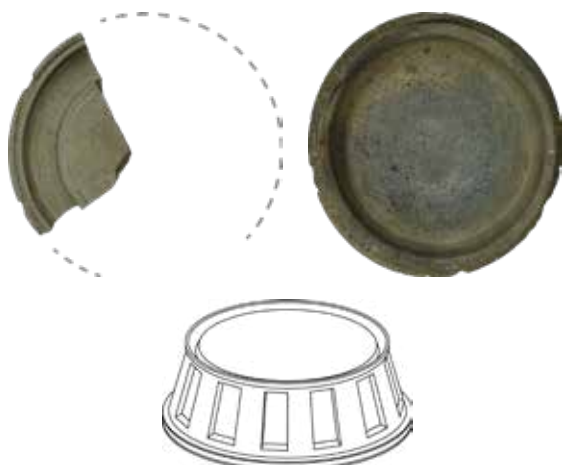


図 9) 長岡遺跡出土の円面硯



図 10) 掘立柱建物群 ほぼ正方形の建物が並ぶ

鉄づくりの里（平安時代）

平安時代の長岡遺跡は、岩殿丘陵における窯業生産の北上に伴い、集落が閑散とし、人々の活動の痕跡は希薄な状況がしばらく続きます。再び人々がこの地に戻ってくるのは9世紀後半（約1,150年前）で、台地の内陸部に新たな集落が成立します。

集落至近の谷地形を生かして、新産業「鉄づくり」が始まります。長岡遺跡と接する花見塚遺跡では、鉄の精錬工程で使用する豎形炉（図11）や、鍛冶工房（豎穴建物）、粘土採掘坑が発見されており、一帯が製鉄を行う作業場であることが明らかとなりました。

鉄づくりの背景には、火の扱いに慣れた窯業従事者が関与していたとみられます。また、灰釉陶器など高級食器の出土から、それらの管理に携わった有力者の存在も想定されます。「鉄づくりの里」は有力寺社や貴族たちの「荘園」の一部だったのかもしれませんが。

中世以降の長岡遺跡

長岡遺跡では平安時代後半（約1,000年前）を最後に豎穴建物が見られなくなります。

鎌倉時代に入ると、入西地域では武蔵武士「浅羽氏」の所領として開発が進み、長岡にも一族の長岡氏が館を構えたと言われます。入西の耕地を潤した取水堰「阿弥陀堰」の掘削も鎌倉時代と言われ、用水を抑えるこの地は浅羽氏にとって要衝であったとみられます。また、長岡遺跡では、戦国時代の掘立建物跡や井戸や屋敷を囲んだ溝、墓地などが見つかっており、耕地と屋敷が点在する農村的景観が広がっていたようです。しかしながら、現在の長岡地区には板碑などわずかな痕跡が残るのみで、中世は謎に包まれています。



図11) 花見塚遺跡17区 豎型炉



図12) 長岡地区に今も残る板碑

おわりに

長岡遺跡が歩んできた物語はいかがだったのでしょうか。旧石器時代から始まるこの物語は、悠久の時を超えて私たちの目の前に姿を表しました。

旧石器時代や縄文時代では、寒冷化などの環境の変化に適応しながら、たくましく生きた人々の姿が浮かび上がり、弥生時代末から古墳時代前期にかけては、水害の影響を乗り越えながら継続した集落の実像が確認できました。そして、古墳時代後期から奈良時代の初め頃は、集落の規模が最盛期を迎えると共に、近隣を治める豪族の姿が垣間見え、奈良時代の後半から中世にかけては、中央集権的な国家体制のもと、公的施設として長岡遺跡が使用された状況を想起することができました。

このように、先人達が残した生活の痕跡は大地に刻まれ、現在でもどこかに眠っています。この痕跡を未来に残していくことは現代に生きる我々の使命でもあります。皆さんも、地域に刻まれた歴史に目を向けて見てはいかがでしょうか。

主な参考文献

大川清ほか編 1996『日本土器辞典』(株) 雄山閣

坂戸市教育委員会 1992『坂戸市史 古代史料編』 坂戸市

加藤恭朗 2013『長岡遺跡 I 長岡遺跡 12 区発掘調査報告書』 坂戸市教育委員会

加藤恭朗ほか 2017『下田遺跡 2—下田遺跡 2 区・4 区発掘調査—』 坂戸市教育委員会

柿沼幹夫 2015「吉ヶ谷式・吉ヶ谷系土器の移動」『第 23 回特別展 ゆくものくるもの—北関東の後期弥生文化—』 かみつけの里博物館

笹森紀己子編 2011『第 22 回企画展示 弥生時代のさいたま～2000 年前の遺跡～』 さいたま市立博物館

田中広明 2002『研究紀要』 古代東国と豪族の家 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中広明 2008『豪族のくらし』 すいれん舎

東国土器研究会 1995『東国土器研究第 4 号』

(株) 雄山閣 2014『季刊考古学第 126 号日本旧石器時代の成り立ちと文化』

(株) 雄山閣 2015『季刊考古学第 132 号旧石器～縄文移行期を考える』

渡辺一 2006『古代東国の窯業生産の研究』

杉山秀宏ほか 2019『第 652 集 金井東裏遺跡』 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫ほか編 1994『稲荷前遺跡 (B・C 区)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

若狭徹 2022「北西関東における弥生後期の遺跡動態と環境変動」『国立歴史民俗博物館研究報告 231』

用語解説

【土師器^{はじき}】

古墳時代～平安時代に作られた素焼き^{すえき}の焼き物。焼き上がりは赤茶色～橙色。

【須恵器^{すえき}】

古墳時代に朝鮮半島から伝わった硬質の焼き物。焼き上がりは灰色～青っぽい灰色。

ロクロを使って成形し、登り窯で焼成する。

【坏^{つき}】

皿よりも深い器。脚がつくと「高坏」になり、より深いボウル状になると「^{わん}塀」と呼ぶ。

【甕^{かめ}】

貯蔵や煮炊きなどの様々な用途に使用された。

【甑^{こしき}】

調理器具の一種。お湯を沸かした甕の上に据え、蒸気を利用して食材を蒸す。

【^{たてあな}堅穴建物^{たてもの}】

地面に掘られた穴の上に屋根を葺いた半地下式の建物。「堅穴住居」とも呼ばれる。

住宅として使うほか、工房や倉庫としても使われる。

【^{ほったてばしら}掘立柱建物^{たてもの}】

柱穴に柱を据えて建てる建物。

平安時代までは、倉庫や官衙（役所）といった特別な建物だけに採用された。

【^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓^ぼ】

弥生時代のお墓の一種。坂戸市周辺では古墳時代に入ってもしばらく採用された。

四角く掘った溝の中心に古墳よりも低い墳丘を設け、亡くなった人を葬る。

【^{ごうぞく}豪族^{たて}】

地域ごとに強い影響力を持っていた一族や有力者たち。

【石器^{せっき}】

^{こくようせき}黒曜石など石材を加工した石製の道具。

【^{さいせきじん}細石刃^{じん}】

石材の剥片^{はくへん}を使用した小さい刃。木や骨の軸棒に差し込んで使用する。交換が可能。

【^{いしきり}石錐^{きり}】

皮革などに穴を開けるための道具。

【^{うじょうじょうもん}羽状縄文^{もん}】

縄文土器に施された文様の一種。矢羽根のような形をしている。

【^{くしがきはじょうもん}櫛描波状文^{もん}】

くし状の工具を使って描いた、波状の文様。

【^{しょうえん}荘園^{えん}】

貴族や寺社などの有力者が所有した私有地。荘園は有力者達の経済的基盤として大きな役割を果たした。

